

論文

国語読解テストの出題傾向とその性質

——公立高校入試問題の記述式問題に着目して

安永 和央*, 齋藤 信**, 坂本 雄士***, 石井 秀宗****

*日本学術振興会, 東京大学大学院教育学研究科, **四日市大学総合政策学部,

浜松学院大学現代コミュニケーション学部, *名古屋大学大学院教育発達科学研究科

The nature and tendency of Japanese language comprehension questions in public high school entrance test

Kazuhiro Yasunaga*, Makoto Saitoh**, Yuushi Sakamoto***, and Hidetoki Ishii ****

* Japan Society for the Promotion of Science, The University of Tokyo, ** Yokkaichi University,

*** Hamamatsu Gakuin University, **** Nagoya University

The purpose of this study was to examine the nature and tendency of questions in Japanese language comprehension tests for public high school entrance examination. Two hundred and forty explanatory texts from 2007 to 2011 were examined. The author, work, category, and variations of descriptive item presentation (773 items) were classified. It was found that choosing texts with examples and logic was effective in selection of the problem text. Moreover, the items with “context consideration” and “figure and table” can be effectively used by test givers to measure understanding in problem structure and items with “paraphrasing” were effective in measuring understanding in choosing example and paraphrasing of a sentence. Lastly, the items requesting “Explanation”, “Summary” and “Yours thought” can be used to measure written expressions which have a number of answer column.

Keywords : Japanese language comprehension test, entrance examination, descriptive item, written expression, answer column

キーワード : 国語読解テスト, 公立高校入試問題, 記述式問題, 表現力, 回答欄

* 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院教育学研究科

Correspondence concerning this article should be sent to: Kazuhiro Yasunaga, Graduate School of Education, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033, JAPAN

Email: yasunaga@p.u-tokyo.ac.jp

1. はじめに

1. 1. 公立高校入試問題を検討する目的

現在、わが国の初等教育及び中等教育においては、思考力・判断力・表現力をはぐくむための基礎となる教科が国語であると考えられており、国語で培ったこれらの能力を基盤に、各教科の知的活動や言語活動の充実を目指している（文部科学省，2007）。この取り組みの一つとして、文部科学省は思考力・判断力・表現力を中心とした学習指導要領の見直しを行った（文部科学省，2008）。これ以前にも「確かな学力」として、思考力・判断力・表現力の育成を目標に掲げてきたが（文部科学省，2003）、これらをより重視するようになった背景には、国立教育政策研究所の教育課程実施状況調査における国語の記述式問題に関する正答率の低下や、OECD（Organisation for Economic Cooperation and Development）のPISA（Programme for International Student Assessment）における記述式問題に対する課題や無回答率の高さ、さらには、全国学力・学習状況調査の知識・技能を活用する問題を苦手としていることが影響している（文部科学省，2007）。特に、これらと関係する中学校の国語科学習指導要領では、先に述べた記述式問題への課題を改善するため、国語の能力の根幹となる、表現力と理解力を育成することを最も基本的な目標に掲げ（文部科学省，2008）、言語活動を充実させた内容構成となっている。具体的には、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域と、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」から構成され、学年ごとにそれぞれの領域で身に付けさせるべき能力を指導事項に明記するとともに、これらを指導するための具体的な言語活動をいくつか例示している。

一方、これらの指導内容に対する評価については、国立教育政策研究所により評価規準が明示されており（国立教育政策所教育課程研究センター，2011a）、学習場面における評価規準の設定、観察やワークシートなどを活用した指導計画や言語活動の工夫の仕方について複数の事例が示されている（国立教育政策所教育課程研究センター，2011a；文部科学省，2012）。また、ペーパーテストを用いた評価として、平成19年度から全国学力・学習状況調査が実施されており（例えば、国立教育政策研究所教育課程研究センター，2007）、この結果から児童・生徒の学習状況が把握され、教育指導の検討や改善に役立てられている（例えば、明治図書，2013）。ただし、全国学力・学習状況調査の実施は年に1度であるため、教育現場では教師各自で評価の目的や学習場面に応じたクラスルームテストを作成・実施する必要性が出てくる。その際、「表現力や理解力」を測定するためには、受検者自身に回答を書かせる記述式問題の需要

が多くなると推測される。これを踏まえると、わが国で用いられている国語読解テスト、特に、その記述式問題の出題傾向を把握することはクラスルームテストを作成する際の有益な知見になり得ると考えられる。このような視点から、よりスタンダードなテストの選択を考えた場合、その一つとして公立高校入試問題が挙げられる。公立高校入試問題は中学校の学習範囲や内容に基づいて作成されているため、中学校の学習内容と公立高校入試問題で問われる内容には密接な関係があると考えられる。したがって、公立高校入試問題の出題傾向やその性質を検討することにより、教育現場のテスト作成に資する知見が提供できると考えられる。以上より、本研究では公立高校入試問題における国語読解テストの記述式問題に着目し、その出題傾向と性質を把握することを目的とする。

公立高校入試問題の出題傾向を整理する際、テストを構成する性質についても考慮することが望まれる。テストの性質は大きく二つに分かれる(安永・石井, 2010)。第一に、内容的性質(内容的妥当性)である。これはテストで「何を問うか」ということに関わってくる。例えば、どの教科について測定するか、その教科内のどの範囲について測定するか、ということがこれに該当する。第二に、構造的性質である。これはその内容を「どのように問うか」ということに関わってくる。具体的には、設問形式(記述式問題、多枝選択式問題等)や設問設定・設問の問い方(受検者に回答を求める際の問いの立て方)などがこれに当たる。二つの性質を分けて検討することで、出題傾向をより詳細に捉えることが期待できる。

本研究では、学習指導要領の目標を踏まえ、国語能力を「国語による表現力と理解力」と定義する。加えて、本研究で対象とするテストは、本文(問題本文)を読んで各記述式問題に回答する、という構造を取ることから、国語の領域の中でも、特に「読むこと」と「書くこと」の評価に焦点を当てたものとする。したがって、本研究では、国語読解テストを「問題本文を読み(「読むこと」に関する理解力)、その内容を踏まえて各記述式問題に回答する力(「書くこと」に関する表現力と理解力)を測定するためのテスト」と定義する。これに先に述べたテストの二つの性質を考慮して検討を行う。まず、内容的性質に関しては、国語読解テストで用いられる問題本文に着目して検討を行う。具体的には、本文として用いられた著者、作品とそのジャンルを整理する。次に、構造的性質に関しては、記述式問題における設問の問い方に着目して検討する。具体的には、設問の種類、設問内容、回答方法について分類する。以上を踏まえ、最後に総合考察を行う。

1. 2. 対象としたテスト

東京学参が 2008 年～2012 年に刊行した 47 都道府県の公立高校入試問題集を対象に、平成 19 年度～平成 23 年度の 5 年間で実施された国語読解テストを検討した。全ての都道府県により出題されているという理由から、論説文・説明文(計 240 題)を対象とし、その著者、作品名、ジャンル及び記述式問題(773 問)における構造的性質について検討した。

2. 内容的性質の検討

2. 1. 著者、作品名の概観及びジャンルの分類

まず、各都道府県の入試問題の本文として用いられた著者、作品に関して概観し、わが国で用いられている問題本文の内容を把握することを目的として、作品のジャンルを分類した。ジャンルについては、問題本文の内容に関して探索的に分類を進めた結果、「言語」、「文化」、「自然」、「科学」、「生物」、「学問」、「生活(その他)」の 7 カテゴリーに収束した。以下にそれぞれのカテゴリ内容を示す。

- ・「言語」：言葉に関するもの全般について書かれた作品である。例えば、「言葉の持つ役割」や「日本語」、「コミュニケーション」に関して書かれたものなどが挙げられる。
- ・「文化」：古くからの伝統や特定の国における文化について書かれた作品である。例えば、「日本人とインド人の認識の違い」や「日本と西洋の住居の違い」について書かれたものなどが挙げられる。
- ・「自然」：環境問題や植物について書かれた作品である。例えば、「植物と動物の共生関係」や「水質汚濁問題」に関して書かれているものなどが挙げられる。
- ・「科学」：科学技術を題材にした作品である。例えば、「ロボットの作業能力」や「発見や発明のアイデア」について書かれたものが挙げられる。
- ・「生物」：人間や動物、昆虫など生き物について書かれた作品である。例えば、「動物の利他行動」や「人間の頭の良さ」について書かれたものが挙げられる。
- ・「学問」：専門的な知識や学術的な内容について書かれた作品である。例えば、「考古学」や「古典」、「記憶」について書かれたものが挙げられる。
- ・「生活(その他)」：日々の生活全般について書かれた作品で、先に述べた 6 種類に分類されない作品である。例えば、「人間関係」や「美についての感受性」、「あいさつ」について書かれたものが挙げられる。

付録（Appendix）に各都道府県で出題された著者，作品とそのジャンルを分類した結果を示す．なお，同じ作品名でも違うジャンルに分類されている作品があるが，本文で出題された箇所（内容）が違うことによる．

2. 2. 著者，作品名及びジャンルのまとめと考察

次に，著者，作品名及びそのジャンルについてのまとめと考察を行う．第一に，著者については，過去5年間で複数回本文として用いられた著者を対象にまとめた．その結果，複数回本文として出題された著者は39名であった（表1）．その中でも特に出題が多かったのは，「茂木健一郎」13回，「外山滋比古」9回，「長谷川権」8回，「日高敏隆」8回，「鷺田清一」7回，の5名であった．複数の都道府県で，特定の年度のみ出題される著者もいれば，5年間に渡り複数年度出題される著者もいた．しかしながら，過去5年間において，同一都道府県で複数回出題された著者は見られなかった．

表1 過去5年間で複数回出題された著者数

出題回数	人数
10回以上	1
7～9回	4
3～6回	8
2回	26

第二に，過去5年間で複数回出題された作品を対象にまとめた．その結果，複数回出題された作品は18題であった（表2）．その中でも特に出題が多かったのは，平成21年度と22年度に計7回の「和の思想（長谷川権）」，平成19年度に6回の「おはようからおやすみまでの科学（佐倉 統・古田ゆかり）」，平成22年度と23年度に計4回の「美しいをさがす旅にでよう（田中真知）」，平成20年度と21年度に計4回の「それでも脳はたくらむ（茂木健一郎）」，の4作品であった．同一年度に同じ作品が出題されるだけでなく，ある年度に出題された作品が，違う年度に別の都道府県で出題されることも確認された．その際，平成20年度と21年度のように翌年に出題されることもあれば，平成20年度と22年度のように2年後，さらには3年後，4年後に出題される場合など様々な状況が見られた．ただし，過去5年間においては，同じ作品が都道

府県を問わず2年続けて出題されることはあっても、例えば平成19年度、20年度、23年度のように3年出題されることはなかった。また、同一作品であっても、必ずしも同じ箇所の記事が出題されているわけではなかった。例えば、「和の思想」では、7つ中4つの県で「日本語の間に関する内容」の文章、2つの県が「日本語の和の本来の意味に関する内容」の文章、1つの県が「生け花による花と空間の生かし方に関する内容」の文章であり、同一箇所を出題している県もあればそうでないところもあった。一方、4回出題されている「美しいをさがす旅にでよう」では、一部重なる文章もあったが、4つの県が異なる出題箇所であった。先に述べた著者の出題と同様、作品においても同一都道府県で複数回出題された作品は見られなかった。

表2 過去5年間で複数出題された作品名、著者及び出題年度

出題数	作品名	著者	出題年度(平成)
7	和の思想	長谷川 権	21, 22
6	おはようからおやすみまでの科学	佐倉 統・ 古田ゆかり	19
4	美しいをさがす旅にでよう	田中真知	22, 23
4	それでも脳はたくらむ	茂木健一郎	20, 21
3	科学者という仕事	酒井邦嘉	19, 20
3	セミたちと温暖化	日高敏隆	21, 23
2	ことばと思考	今井むつみ	23
2	木の文化をさぐる	小原二郎	20, 22
2	貧乏クジ世代	香山リカ	21, 22
2	感動をつくれますか？	久石 讓	19
2	目を閉じて心開いて	三宮麻由子	20, 23
3	森林からのニッポン再生	田中淳夫	20
2	知的創造のヒント	外山滋比古	22
2	生命にぎわう青い星	樋口広芳	23
2	本の読み方 スロー・リーディングの実践	平野啓一郎	19, 23
2	日本語 表と裏	森本哲郎	22, 23
2	日本語の歴史	山口仲美	19
2	「生物多様性」入門	鷲谷いづみ	23

第三に、過去5年間で出題された問題本文のジャンルを把握することを目的としてこれを整理した。その結果、本文として用いられるジャンルは「生活(その他)」に関するものが多かった。これは、他のジャンルに分類されないもの

が「生活」に分類されることも影響しているが、内容的に日々の生活に関わることをテーマとした作品が多く出題されていることも関係している。例えば、「考え方や生き方」、「自己を表現する服装」や「生きることの意味」をテーマにした本文など、日常の生活と関わることをテーマとしたものである。このような日常生活に関わるものが本文として約38%出題されていた。次に「言語」が多く約18%の出題であった。「日本語のアガルとノボル」をテーマにした本文や「想像力を刺激する読書」をテーマにした本文、「言葉の織物としての俳句」をテーマとした本文など、言葉そのものをテーマにしたものから、言葉が関わっている読書、さらに俳句をテーマにしたものなど「言語」とひとことに言っても幅広いテーマが見受けられた。その次は、「文化」と「自然」が同程度で約13%の出題であった。「文化」では、「日本の間」をテーマにした本文や「日本と西洋の自然観の違い（庭を比べる）」をテーマにした本文など、基本的には、日本文化と別の国の文化を比較した本文が出題されていた。また、「日本の間」をテーマにした「長谷川權」の「和の思想」が平成21年度に1題、平成22年度に6題出題されており、近年において「文化」を代表する作品であると言えよう。「自然」では、「人と森の共存」をテーマにした本文や「里山」をテーマにした本文など、人と自然の関係をテーマとした本文が多く出題されていた。最後に、「科学」、「生物」、「学問」が同程度出題されていた。「科学」では、「科学の進歩」をテーマにした本文、「生物」では、「動物や昆虫」をテーマにした本文、「学問」では、「専門性に関わるもの」をテーマにした本文が出題されており、これら三つのジャンルを合計して全体の約17%であった。以上の結果から、「生活（その他）」や「言語」に関する出題が多く、「科学」、「生物」、「学問」はそれほど多くないことがわかった。

以上の結果から、内容的性質について考察を行う。過去5年間、問題本文として用いられる著者は、その大半が異なるが、特定の著者においては複数回用いられることが確認された。このような需要の多さから、これらの著者の作品は問題本文として好まれる構成になっていると推察される。それでも、同一著者が同じ都道府県で複数回用いられることはなかった。その理由として、たとえ異なる作品であっても、ある著者の作品のみ出題し続けると、特定の思考(考え)に関する読解テストに偏る可能性があるためと考えられる。例えば、茂木健一郎は、「専門性に重要な知性に関する内容」、「エピソード記憶に関する内容」、のような学問的内容や、「人が利他行動を行う理由に関する内容」、「住宅の設計に関する内容」、など生活に関わる内容の文章が多い。また、外山滋比古は、「言葉と記憶に関する内容」、「言葉が人の精神を作るに関する内容」、

のような言語に関わる内容のものが多く、著者独自の内容的な特徴があるように思われた。

作品においても、複数回出題されるものが見られ、同一年度に同じ作品が複数の都道府県で出題されることもあれば、ある年度に出題された作品が違う年度に別の都道府県で出題されることも確認された。これを踏まえると、問題本文として良質な作品は、たとえ一度使用されていても他の都道府県で出題され得るということがわかった。ただし、同一作品であっても、同じ箇所が問題本文として用いられることもあれば、違う箇所が用いられることもあった。同じ箇所が問題本文として用いられた際、設定される設問は一部重なる箇所もあったが、ほとんどが異なるものであった。同一本文を用いても、設問を変えることにより、ある程度テストの弁別化を図ることが可能になり得ると考えられる。

ジャンルの分類は、現在の国語読解テストの問題本文として出題されている内容を把握するために行ったものであり、問題本文の選定の際に、これらの出題傾向に沿って出題することを勧めるためのものではない。問題本文を選定する際には、出題者の測定目的に合ったジャンルを選ぶことが重要である。中学国語科学習指導要領の「読むこと」の指導事項では、「自分の考えの形成に関する指導事項」がある。ここでは、学年ごとに求められる内容は異なるが、文章に表れているものの見方や考え方について、自分の考えを広くすること、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと、人間、社会、自然について考え自分の意見をもつことが求められる（文部科学省、2008）。つまり、ここで求められていることは、文章に表れているものの見方や考え方に対して自分の考えや意見を持つことである。そのため測定に関しては、問題本文の内容（ものの見方や考え方の内容）は特定のものに限定されず、むしろ、その測定目的に合ったものを選ぶことが重要であると考えられる。例えば、「科学」の知識や体験と関連付けさせることを目的とするならば、問題本文の内容は「科学」に関する文章を選ぶことが適切であろう。論文の末尾の Appendix は、測定目的とするジャンルに対応する作品を選定するための資料として活用されたい。

3. 構造的性質の検討

3.1. 構造的性質の分類

構造的性質は、設問構造及び内容に関して探索的に分類を進めた結果、設問の種類、設問内容、回答方法の三つに収束し、さらに、それぞれが詳細に分類された。以下、設問の種類、設問内容、回答方法ごとに説明を行う。

まず、設問の種類は、「通常問題」、「空所補充問題」、「語句指定問題」の三

種類に分類された。

- ・「通常問題」：設問の内容が文章で記述されており，その問いに回答する設問である。
- ・「空所補充問題」：設問文や本文の一部，あるいは，図や表の一部が空所になっており，その空所に該当する文章や語句を回答する設問である。
- ・「語句指定問題」：指定された特定の語句や単語を用いて回答する設問である。

次に，設問内容は，「説明・理由・原因」，「まとめ・要約・趣旨」，「自分の意見」，「文脈考慮・会話文」，「図・表」，「対応・言い換え」の六つに分類された。

- ・「説明・理由・原因」：～を説明しなさい，～の理由を書きなさい，～のきっかけとなったことを書きなさい，というような下線部に関する説明や理由を問う設問である。
- ・「まとめ・要約・趣旨」：～を要約して書きなさい，本文の趣旨に添って書きなさい，本文の要旨を書きなさい，のように本文や段落の要点をまとめる設問である。
- ・「自分の意見」：～について各自が意見を発表するとしてあなたが話す言葉を書きなさい，～についてあなたの考えを書きなさい，のように本文の内容を踏まえ，自分の言葉で回答を作成する設問である。
- ・「文脈考慮・会話文」：空所に当てはまる語を書きなさい，意見交換している内容が正しくなるように空所に適する語句を書きなさい，など空所に適した語句や文章の記述を求める設問である。
- ・「図・表」：次のグラフから読み取れることを書きなさい，本文の内容を整理した次の表の該当箇所に適当な言葉を書きなさい，など特定の段落の内容が図や表にまとめられており，その図や表に関する回答を求める設問である。
- ・「対応・言い換え」：～に対応することを書きなさい，下線部を具体的に述べている部分を書きなさい，～はどのようなものの比喩か，など下線部を別の表現で言い換えたものや指示語の言い換え，下線部の具体例，下線部の対比を問う設問である。

一部では，「説明・理由・原因」とも「対応・言い換え」とも捉えることができる設問があるが，複数箇所をまとめて該当箇所の説明を構成する場合は「説明・理由・原因」，特定の文章や語句で該当箇所を言い換える場合は「対応・言い換え」に分類した。

最後に、回答方法は、以下の六つに分類された。

- ・ I : ○字以内で書きなさい、
- ・ II : ○字以上○字以内で書きなさい、
- ・ III : ○字程度で書きなさい、
- ・ IV : ○字で抜き出しなさい (字数指定がなされず、単に「抜き出しなさい」もIVに分類)、
- ・ V : 最初の○字を書きなさい (「最初の○字と最後の○字を書きなさい」も含む)、
- ・ VI : 書きなさい (字数制限なし、自由記述)、である。

3. 2. 構造的性質のまとめと考察

まず、設問の問い方の全体像を把握するため、通常問題、空所補充問題、語句指定問題と回答方法 (I ~ VI) の分類数を検討した。その結果、全体の傾向としては約 54%が通常問題であり、記述式問題では、本文の内容に関し、文章で問われる設問が最も多いことが確認された。空所補充問題に関しては全体の 37%出題されており、単に空所補充問題と言っても様々な設定の仕方が見受けられた。語句指定問題は約 9%の出題であり、特定の設問内容における出題が目立った。一方、回答方法としては、I : ○字以内で書きなさい (約 31%) と、IV : ○字で抜き出しなさい (約 31%)、の二つが多く出題されていた。I は主に通常問題での出題が多く、IV は空所補充問題における出題が多かった。二番目に多かったのが、II : ○字以上○字以内で書きなさい (約 16%) であり、通常問題における出題が多数見受けられた。III : ○字程度で書きなさい (約 5%)、V : 最初の○字を書きなさい (約 7%)、VI : 書きなさい・自由記述 (約 10%)、の三つは特定の設問内容による出題が際立ち、全体としてはそれほど多くなかった。

次に、より詳細な検討を行うため、設問内容ごと (「説明・理由・原因」、「まとめ・要約・趣旨」、「自分の意見」、「文脈考慮・会話文」、「図・表」、「対応・言い換え」) に設問の種類、回答方法の順に検討する。

「説明・理由・原因」においては、通常問題が最も多かった (約 60%)。回答方法は I と II が多く、「説明・理由・原因」を問う設問では、○字以内で書きなさい、○字以上○字以内で書きなさい、という字数制限を設けることが多いということがわかった。また、回答方法の III は、全 42 問中 26 問 (約 60%) が「説明・理由・原因」により出題されていた。これにより、○字程度で書きなさい、という回答指定は「説明・理由・原因」を問う設問において多数設定

されるということがわかった。

「まとめ・要約・趣旨」では、通常問題、空所補充問題、語句指定問題の全てがほぼ均一で出題されていた。また、先に述べた「説明・理由・原因」と「まとめ・要約・趣旨」において、語句指定問題全 71 問中 66 問（約 90%）が出題されていた。回答方法としては、I と II が多く、回答欄に字数制限を設け、長い文章を記述させる出題が特徴的であった。

「自分の意見」においては、通常問題の出題が多く、一部空所補充問題も見られた。回答方法は、I、II、VI が多く、ある程度長い文章を記述させる出題が多かった。

「文脈考慮・会話文」においては、全てが空所補充問題による出題であり、回答方法はIVが約 74%と最も多かった。文脈を考慮して回答を求める設問や、本文の内容に関して話し合いをしている設問の場合、文章の途中に空所を設定し、回答欄はある特定字数を抜き出す設定が多いことがわかった。

「図・表」においては、一部の設問を除いてほとんどが空所補充問題による出題であった。回答方法はIVが最も多く、I の設定も多少見られた。先に述べた「文脈考慮・会話文」や「図・表」で設定される空所補充問題においては、○字で抜き出しなさい、のように特定の単語や語句、文章を抜き出す回答を求めることが多いことがわかった。

「対応・言い換え」においては、約 95%が通常問題の出題であった。下線部に対応するもの、あるいは、下線部の言い換えを問う際に、そのほとんどが文章で書かれた設問であり、多くの場合語句指定を行わないことがわかった。回答方法は、I、IV、V が多く、V は全 52 問中 35 問（約 67%）が「対応・言い換え」により出題されていることが明らかになった。これにより、受検者が回答すべき箇所の最初の○字を書きなさい、という回答方法の多くが「対応・言い換え」による出題であることがわかった。

これらの結果を基に、設問の種類や回答方法の類似性から、設問内容を整理した。具体的には、『「説明・理由・原因」、『まとめ・要約・趣旨』、『自分の意見』』（以後、『「説明」・「まとめ」・「自分の意見」』）を一組に、『「文脈考慮・会話文」、『図・表』』（以後、『「文脈考慮」・「図」』）を一組にまとめ、「対応・言い換え」のみ独立で扱った。これらの結果を表 3、表 4、表 5 に示す。その結果、『「説明」・「まとめ」・「自分の意見」』は通常問題が最も多く、回答方法は I：○字以内と II：○字以上○字以内が多かった。また、VI：制限なしが、全 78 問中 42 問（54%）出題されていた。一方、『「文脈考慮」・「図」』は、ほぼ全てが空所補充問題であった。回答方法は、IV：○字で答えるものが最も多く、

表3 『「説明」・「まとめ」・「自分の考え」』における設問の分類数 (%)

設問の種類	回答方法						合計
	I:○字以内	II:○字以上○字以内	III:○字程度	IV:○字	V:最初の○字	VI:制限なし	
通常問題	106	50	21	16	11	31	235 (58.6)
空所補充問題	38	11	5	35	3	8	100 (24.9)
語句指定問題	22	35	6	0	0	3	66 (16.5)
合計	166 ^{a)} (41.4)	96 ^{b)} (23.9)	32 (8.0)	51 (12.7)	14 (3.5)	42 (10.5)	401 ^{c)} (100)

注) 空所補充問題であり、かつ、語句指定問題である設問が3問あった。

そのため実際の合計設問数は、a) 164, b) 95, c) 398 である。

表4 『「文脈」・「図」』における設問の分類数 (%)

設問の種類	回答方法						合計
	I:○字以内	II:○字以上○字以内	III:○字程度	IV:○字	V:最初の○字	VI:制限なし	
通常問題	0	0	0	0	0	0	0 (0)
空所補充問題	27	10	1	125	3	13	179 (97.8)
語句指定問題	0	1	0	1	0	2	4 (2.2)
合計	27 (14.8)	11 ^{d)} (6.0)	1 (0.5)	126 (68.9)	3 (1.6)	15 ^{e)} (8.2)	183 ^{f)} (100)

注) 空所補充問題であり、かつ、語句指定問題である設問が2問あった。

そのため実際の合計設問数は、d) 10, e) 14, f) 181 である。

表5 「対応・言い換え」における設問の分類数 (%)

設問の種類	回答方法						合計
	I:○字以内	II:○字以上○字以内	III:○字程度	IV:○字	V:最初の○字	VI:制限なし	
通常問題	42	20	9	58	35	20	184 (94.8)
空所補充問題	4	0	0	4	0	1	9 (4.6)
語句指定問題	0	1	0	0	0	0	1 (0.5)
合計	46 (23.7)	21 (10.8)	9 (4.6)	62 (32.0)	35 (18.0)	21 (10.8)	194 (100)

全設問内容でも 239 問中 126 問 (53%) と最も出題が多かった。「対応・言い換え」は、先に述べた通りである。

さらに、都道府県ごとの出題傾向を見てみると、様々な設問の種類、設問内容、回答方法を出題しているところもあるが、多数の都道府県が、過去の出題と類似していることが確認された。例えば、東京都は、過去 5 年、『「説明」・「まとめ」・「自分の意見」』に関して I : ○字以内で書きなさい、という設問を出題し、一方、福岡県は過去 5 年間で、必ず『「文脈考慮」・「図」』において IV : ○字で書きなさい、という設問が出題されている。

以上の結果を踏まえ、本研究の国語能力である「国語の表現力と理解力」の観点から、「読むこと」と「書くこと」の能力を測定するための記述式問題について考察する。記述式問題において、書くことに関する「表現力」を評価する場合は受検者の回答となる。回答として、ある程度の長い記述を要求する設問では、「表現力」を広い範囲で測定することが可能になると考えられる。一方、ある特定の言葉を抜き出すものや、制限された回答を求めるものは、記述内容が定められているため、限定された表現力や表現力の一部の測定になると考えられる。本研究の結果を踏まえると、まず『「説明」・「まとめ」・「自分の意見」』を求める設問は、他の設問内容に比べ、I : ○字以内で書きなさい、II : ○字以上○字以内で書きなさい、VI : 書きなさい (字数制限なし)、という回答方法が多く用いられており、回答字数の長いものも多数見受けられた。これを考慮すると、ある事柄に対する説明、特定の事象に関する理由、本文の趣旨、といった本文や設問の内容に対する「理解力」に加え、特に書くことに関する「表現力」を測定することを目的とする場合に、『「説明」・「まとめ」・「自分の意見」』をある程度の回答スペースを持たせて問う設問が設けられると考えられる。また、中学国語科学習指導要領の「書くこと」の指導事項では「記述に関する指導事項」がある。これは、学年により求められる内容は異なるが、記述の際、根拠を明確にして書くこと、相手に効果的に伝わることを意図して説明や具体例を加えて書くこと、論理の展開を工夫し、資料を適切に引用して書くことが求められる (文部科学省, 2008)。これらを踏まえた設問としても、「～を説明しなさい」、「～の理由を書きなさい」、のような説明や理由 (根拠) を求める内容、「～を要約して書きなさい」、「本文の趣旨に添って書きなさい」、のような本文の論理展開のまとめを求める内容、「～についてあなたの考えを書きなさい」、のような相手に効果的に伝わる説明を求める内容、として『「説明」・「まとめ」・「自分の意見」』を求める設問にある程度の長さの回答スペースを設けたものが適していると考えられる。

次に、『「文脈考慮」・「図」』はⅣ：○字で抜き出しなさい、という回答字数が完全に限定されているものが多数を占めていた。先に述べたように回答字数が制限されている場合は記述内容がある程度限定されるため、表現力を十分に捉えることは難しく、むしろ、この種類の設問は空所前後の文脈や図や表の構造を理解し、該当箇所に適した文や語句を選択する能力が求められていると考えられる。これを踏まえると、問題本文の文脈やある特定の文章をまとめたテキストの文脈、あるいは、本文の内容を図示したものの読み取りに関する「理解力」を測定したい場合に、『「文脈考慮」・「図」』における空所補充問題が設定されると考えられる。ただし、『「文脈考慮」・「図」』では、必ずしも「表現力」を評価できない、ということではない。回答方法として割合は少ないものの、Ⅰ：○字以内で書きなさい、Ⅱ：○字以上○字以内で書きなさい、と設定されているものもあり、文脈考慮の内容で説明や理由を求めたり、図や表の中で、本文の要旨をまとめさせたりすることも可能であると考えられる。

そして、「対応・言い換え」は、Ⅰ：○字以内で書きなさい、Ⅳ：○字で抜き出しなさい、Ⅴ：最初の○字を書きなさい、という出題が多く、特にⅣとⅤでは回答字数が完全に限られており、指定された文章や言葉に対応する箇所を読み取る力が求められていると考えられる。これを踏まえると、特定箇所の言い換えやその具体例を読み取らせる、あるいは、該当箇所と対応するものを読み取らせることに関する「理解力」を測定したい場合に、「対応・言い換え」を求める設問設定がなされると考えられる。

各都道府県の記述式問題の出題は、非常に多くの都道府県で一定の類似した出題傾向が見られた。この理由は、各都道府県でテストを作成する際、その都道府県のテストの慣習や過去のテスト作成の出題傾向に従って作成しているためと推察される。測定意図が、出題傾向として表れている特定の「表現力や理解力」を測定することである場合は、慣習や過去のテスト作成に従った出題で問題ないが、測定意図とは関係なく単に慣習に倣って作成している場合は、違う観点からの出題を取り入れることで、より多角的な視点から「表現力と理解力」の測定が期待できる。

4. 総合考察

本論文では、公立高校入試問題を対象に、「読むこと」と「書くこと」に焦点を当て、「表現力と理解力」を含めた国語能力の測定に資する知見を提供することを目的として、内容的側面では、著者、作品名及びそのジャンルについて、構造的側面では、設問の種類、設問内容、回答方法について整理した。以

下では、これらの内容の総括を行う。

まず、内容的性質について検討する。各都道府県における問題本文の出題に関して、多数の著者や作品は異なっていたが、一部複数回用いられる特定の著者や作品が確認された。これらの傾向から、出題者により中学の国語読解テストの本文として良質と見なされる作品があると推察された。その代表作品である、長谷川權「和の思想（日本の間についての箇所）」の内容を見てみると、日本の間として、空間的な間や時間的な間を取り挙げ、日本と西洋におけるそれぞれの違いについて具体例を対比させながら論を進めている。中学国語科学習指導要領の「読むこと」では、指導事項として、「文章の解釈に関する指導事項」がある。この事項の説明的な文章の解釈に関しては、学年により求められることは異なるが、文章の中心的な部分と付加的な部分や事実と意見などを読み分け要旨をとらえること、文章全体と部分との関係や例示の効果について考えること、文章の論理の展開の仕方をとらえることが求められる（文部科学省、2008）。この指導事項と照らし合わせてみても、「和の思想」は具体的な例示が明確であり、日本と西洋を対比させながら論理展開されており、指導事項の要件に適した内容構成であると考えられる。また、このように具体例や対比がうまく使われている文章は、「説明」を問う設問や「表」を用いて対比を問う設問、あるいは、「対応」する箇所を問う設問等、出題者の測定意図に合わせた設問設定がしやすい文章であるとも考えられる。これらを踏まえると、文章全体と部分との関係や例示の効果が明らかな文章、文章の論理の展開が明確な文章を選定することが良質な問題本文の出題につながると考えられる。また、ジャンルを見てみると、中学校の他の教科では学習しない、伝えきれないような、日本文化や最新の科学技術、記憶のメカニズム、世の中の動き、に関するものが数多く取り上げられていた。測定意図として問いたいジャンルは明確であるが、作品の選定に迷う際には、本論文の Appendix が参考資料となるであろう。

次に、構造的性質について検討する。構造的性質は設問の種類、設問内容、回答方法に分類され、「表現力と理解力」の観点から、回答方法に着目して設問内容ごとの検討を行った結果、以下三つの知見が得られた。第一に、問題本文に関する「理解力」に加え、書くことに関する「表現力」を主に測定する場合は、ある程度長い回答字数を設けた『「説明」・「まとめ」・「自分の意見」』が設定しやすいと考えられた。国語科学習指導要領を考慮して作成された、全国学力・学習状況調査においても、平成 24 年度調査では、祖母にデジタルカメラの使い方を説明することを求める設問において、回答字数を六十字以上八十

字以内と設定し、受検者の「表現力」を評価している（国立教育政策研究所教育課程研究センター，2012）。さらに、平成25年度調査では、1) 説明文を読んで、「かるた」についてわかったことの記述（説明）に加え、2) さらに調べたいことを述べさせ、3) その情報を集める手段について論じさせる、といった3段階の回答欄を設定している（国立教育政策研究所教育課程研究センター，2013）この設問を参考にすると、「説明」に「自分の意見」を加えた設問設定を行うことにより、複数の観点から「表現力」を測定することも可能であると考えられる。第二に、問題本文の文脈や本文の内容を図示したもの読み取り、図や表の構成による問題本文の「理解力」を主に測定したい場合は、○字で抜き出しなさい、のような回答を限定した『「文脈考慮」・「図」』による設問が設定できると考えられた。また、回答字数にある程度の長さを設け、図や表の中で、ある事柄の説明を求める設問を設定することにより、「表現力」に着目した測定も可能であると考えられた。さらに、全国学力・学習状況調査では、説明的な文章と図との関連を考えながら回答させる設問がある（例えば、国立教育政策研究所教育課程研究センター，2011b）。この問題を参考にすると、図や表を資料として提示し、これと本文の内容を関わらせて回答する設問を設定することで、書かれている情報を基にした回答を求めることや、資料を適切に引用した回答を求める設問を設定することも可能であると考えられる。第三に、特定箇所の具体例や言い換え、特定の文章と対比する所を読み取らせることにより問題本文の「理解力」を測定したい場合、「対応・言い換え」を求める設問が設定されやすいと考えられた。具体例や言い換える文はある程度限定されていることが多いため、「対応・言い換え」は「表現力」を捉えるというよりも「理解力」を問う設問として用いられると考えられる。

参考文献

- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2007）．平成19年度 全国学力・学習状況調査解説資料－中学校 国語－．
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2011a）．評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料 中学校 国語．教育出版株式会社．
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2011b）．解説資料 中学校 国語．
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2012）．平成24年度 全国学力・学習状況調査解説資料 中学校 国語．
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2013）．平成25年度 全国学力・

- 学習状況調査解説資料—一人一人の生徒の学力・学習状況に応じた学習指導の改善・充実に向けて— 中学校 国語.
- 明治図書 (2013). 「学テ」が示す新学力像→授業研修の課題. 授業力 & 学級統率力, 43. 明治図書.
- 文部科学省 (2003). 初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について 中央教育審議会 2003年10月7日
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/03100701/003.htm> (2014年2月24日)
- 文部科学省 (2007). 教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ. 中央教育審議会.
- 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領解説—国語編—.
- 文部科学省 (2012). 言語活動の充実に関する指導事例集 中学校版. 教育出版株式会社.
- 安永和央・石井秀宗 (2010). 図の提示法が能力評価に及ぼす影響に関する一考察—中学国語読解テストを用いて— 日本テスト学会誌, 6, 87-101.

国語読解テストの出題傾向とその性質

Appendix 都道府県別・年度別の著者、作品名及びそのジャンル

都道府県	年度	著者	作品名	ジャンル
北海道※	23A	鈴木孝夫	ことばの社会学	生活
	23B	中根千枝	適応の条件	文化
	22A	亀井勝一郎	私の読書論	言語
	22B	鷺谷いづみ	自然再生	自然
	21A	外山滋比古	日本語の論理	言語・生活
	21B	中川 元	世界遺産・知床がわかる本	自然
	20	鈴木公雄	考古学はどんな学問か	自然・学問
	19	河合雅雄	ふしぎの博物誌	学問
青森県	23	石黒 浩	ロボットとは何か	科学
	22	日高敏隆	なぜ飼い犬に手をかまれるのか 動物たちの言い分	生物
	21	長谷川 權	和の思想	文化
	20	西村 亨	王朝びとの四季	文化
	19	辻 信一	「ゆっくり」でいいんだよ	生活
岩手県	23	原 研哉	美意識は資源である	文化
	22	竹田青嗣	中学生からの哲学「超」入門	言語・生活
	21	茂木健一郎	それでも脳はたくらむ	学問
	20	酒井邦嘉	科学者という仕事	学問・生活
	19	小田 亮	ヒトは環境を壊す動物である	自然・生物
宮城県	23	佐々木健一	美学への招待	生活
	22	田中真知	美しいをさがす旅にしよう	文化
	21	大澤真幸	「愛」の不思議	生物
	20	著作権者が二次使用の許可を出していないため、掲載なし		
	19	茂木健一郎	ひらめき脳	言語・学問
秋田県	23	論説文・説明文の問題なし		
	22	香山リカ	貧乏クジ世代	生活
	21	濱田 穰	なぜヒトの脳だけが大きくなったのか	生物
	20	呉 善花	日韓＝合わせ鏡の世界	文化
	19	佐倉 統・古田ゆかり	おはようからおやすみまでの科学	科学
山形県	23	根本正之	日本らしい自然と多様性 身近な環境から考える	生活
	22	斎藤美津子	きき方の理論 続・話しことばの科学	言語・生活
	21	石川直樹	記載なし	自然・生活
	20	田中淳夫	森林からのニッポン再生	自然
	19	蒲谷 宏	伝え合いの言葉	生活
福島県	23	小野良太	未来を変えるちよつとしたヒント	生活
	22	外山滋比古	知的創造のヒント	生活
	21	中村雄二郎	哲学の現在—生きることを考えること—	生活
	20	畑村洋太郎	組織を強くする技術の伝え方	生活
	19	戸川達男	動物の生き方 人間の生き方	言語
東京都	23	鈴木三男	日本人と木の文化	自然
	22	高田明典	難解な本を読む技術	学問・生活
	21	大庭 健	いま、働くということ	言語
	20	黒田玲子	科学を育む	科学
	19	酒井邦嘉	科学者という仕事	科学
神奈川県	23	田中真知	美しいをさがす旅にしよう	文化
	22	丸山康司	自然エネルギーと市民風車	生活
	21	田嶋謙三・神田リエ	森と人間	自然
	20	甲斐徹郎	自分のためのエコロジー	生活
	19	佐倉 統・古田ゆかり	おはようからおやすみまでの科学	科学・生活

※ A・B は入試形態の違いを表す。A は学校別に問題の一部を難易度の高いものに変更できる学校裁量問題選択校用の問題であり、B は標準問題である。

Appendix 都道府県別・年度別の著者、作品名及びそのジャンル（続き）

都道府県	年度	著者	作品名	ジャンル
	23A		著作権者が二次使用の許可を出していないため、掲載なし	
千葉県 ^{※※}	23B	森田昌嗣	わかりやすい街のデザイン	生活
	22	羽生善治	決断力	生活
	21	日高敏隆	ネコはどうしてわがままか	自然・生物
	20	清水義範	行儀よくしろ。	言語
	19	大田 堯	生命のきずな	自然・生物
埼玉県	23	田中優子	未来のための江戸学	生活
	22	稲邑哲也	ロボットのおへそ	科学
	21	江崎保男	生態系ってなに？	自然
	20	鷺田清一 他	いのちってなんだろう	生活
	19	花里孝幸	ミジンコ先生の水環境ゼミ	自然
茨城県	23	祖父江逸郎	長寿を科学する	生活
	22	石城謙吉	森林と人間—ある都市近郊林の物語	自然
	21	池内 了	疑似科学入門	科学
	20	田中淳夫	森林からのニッポン再生	自然
	19	波平恵美子	いのちの文化人類学	生活
栃木県	23	加藤秀俊	暮らしの思想	生活
	22	小原二郎	木の文化をさぐる	文化
	21	野田研一	自然を感じるこころ—ネイチャーライティング入門	自然
	20	山鳥 重	ヒトはなぜことばを使えるか	言語
	19	茂木健一郎	脳の中の人生	学問・生活
群馬県	23	三谷龍二	僕の生活散歩	生活
	22	鷺田清一	嗜みきれない想い	生活
	21	石原武政	「理論的」思考のすすめ	生活
	20	茂木健一郎	感動する脳	生活
	19	久石 譲	感動をつくれますか？	生活
新潟県	23	内山 節	清浄なる精神	生活
	22	長谷川 權	和の思想	文化
	21	茂木健一郎・黛まどか	俳句脳—発想、ひらめき、美意識	言語
	20		著作権者が二次使用の許可を出していないため、掲載なし	
	19	平野啓一郎	本の読み方 スロー・リーディングの実践	言語
富山県	23	花里孝幸	自然はそんなにヤワじゃない 誤解だらけの生態系	自然
	22	森本哲郎	日本語 表と裏	言語
	21	内山 節	日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか	生活
	20	日高敏隆	生物多様性はなぜ大切か？	文化
	19	養老猛司	超バカの壁	言語
石川県	23	田中真知	美しいをさがす旅にでよう	文化・生活
	22	千住 博	美術の核心	文化
	21	川田順造	人類の地平から	学問・生活
	20	木下順二	”劇的”とは	学問・生活
	19	白幡洋三郎	都市から都会へ	文化
福井県	23	三宮麻由子	目を閉じて心開いて—本当の幸せって何だろう	生活
	22	原田信男	食べるって何？	生活
	21	山崎正和	文明としての教育	生活
	20	茂木健一郎	記憶	生活
	19	山口仲美	日本語の歴史	言語

※※ A・B は入試日程の違いを表す。

国語読解テストの出題傾向とその性質

Appendix 都道府県別・年度別の著者、作品名及びそのジャンル（続き）

都道府県	年度	著者	作品名	ジャンル
山梨県	23	鷺谷いづみ	「生物多様性」入門	生物
	22	外山滋比古	省略の文学	言語
	21	木谷 収	バイオマスは地球環境を救えるか	自然
	20		古文との混合問題	
	19	中村桂子	生命誌の世界	科学
長野県	23	樋口広芳	生命にぎわう青い星	自然・生物
	22	大石久和	国土学再考	文化・自然
	21	茂木健一郎	それでも脳はたくらむ	生物
	20	黒川伊保子	日本語はなぜ美しいのか	言語・文化
	19	佐倉 統・古田ゆかり	おはようからおやすみまでの科学	生活
岐阜県	23A		著作権者が二次使用の許可を出していないため、掲載なし	
	23B	加賀乙彦	不幸な国の幸福論	生活
	22A	加藤秀俊	人間関係	生活
	22B	長谷川 權	和の思想	文化
	21A	稲垣真澄	場所の心 時のすがた	生活
	21B	菊池恭二	宮大工の人育て	自然
	20	長谷川 宏	高校生のための哲学入門	生活
	19	池谷裕二	薬の開発のために脳をきわめる	科学
静岡県	23	茂木健一郎	笑う脳	生活
	22	枝廣淳子・内藤 耕	入門！システム思考	生活
	21	鷺田清一	てつがくを着て、まちを歩こう	生活
	20	野口恵子	かなり気がかりな日本語	言語
	19	佐倉 統・古田ゆかり	おはようからおやすみまでの科学	科学・生活
愛知県 ^{※※}	23A		論説文・説明文の問題なし	
	23B	浜田久美子	森の力—育む、癒す、地域をつくる	自然
	22A	木下史青	博物館へ行こう	学問
	22B	大河内直彦	あふれたコップに水を注ぐ	科学
	21A		論説文・説明文の問題なし	
	21B	小林 隆	現代方言の正体	言語
	20A	茂木健一郎	すべては脳からはじまる	生活
	20B	三宮麻由子	目を閉じて心開いて	生活
	19A	岡本夏木	子どもとことば	言語
19B	外山滋比古	ことばの作法	言語	
大阪府 ^{※※}	23A1	日高敏隆	セミたちと温暖化	生物
	23A2	大野 晋	日本語の年輪	言語・自然
	23B		著作権者が二次使用の許可を出していないため、掲載なし	
	22A	黒田玲子	科学技術と社会—なぜ対話が必要なのか	生活
	22B	小野正弘	オノマトペがあるから日本語は楽しい	言語
	21A	柴田 武	ことばの意味	言語
	21B	後藤則行	中・高校生のためのやさしい地球温暖化入門	科学
	20A	倉八順子	ことばとことばとコミュニケーション	生物・生活
	20B	池内 了	ヤバな科学	学問・科学
	19A	池田清彦	初歩から学ぶ生物学	科学・生物
19B	三上和利	未知への冒険	言語	
京都府	23	高階秀爾	移ろいの美学—四季と日本人の美意識	文化・学問
	22	白幡洋三郎	日本人にとっての庭	文化・自然
	21	三村昌義	季節をみなおす	自然・学問
	20	宮崎 清	「人心の華」としての伝統的工芸品	文化
	19	柏木 博	「しきり」の文化論	文化

※※ A・Bは入試日程の違いを表す。なお、大阪府23年度のA1・A2は入試形態の違いを表す。

Appendix 都道府県別・年度別の著者、作品名及びそのジャンル（続き）

都道府県	年度	著者	作品名	ジャンル
兵庫県	23	鷲田清一	わかりやすいはわかりにくい	生活
	22	加藤重広	その言い方が人を怒らせる	言語
	21	田村 明	まちづくりと景観	文化・生活
	20	岡崎武志	読書の腕前	生活
	19	山崎武也	「品格」の磨き方	文化・生活
奈良県	23	今井むつみ	ことばと思考	言語・生活
	22	長谷川 權	和の思想	文化
	21	野内良三	偶然を生きる思想	文化
	20	茂木健一郎	それでも脳はたくらむ	生活
	19	中尾正義	子どもたちに語るこれからの地球	自然
滋賀県	23	平野啓一郎	本の読み方 スロー・リーディングの実践	言語
	22	黛 まどか	俳句脳—発想, ひらめき, 美意識	言語・生活
	21	内山 節	自由論	自然
	20	畑村洋太郎	失敗学のすすめ	生活
	19	外山滋比古	古典論	言語
三重県	23	斎藤 孝	読書力	言語・生活
	22	長谷川 權	和の思想	文化
	21	日高敏隆	セミたちと温暖化	自然
	20	梅棹忠夫	知的生産の技術	言語
	19	井原俊一	日本の美林	自然
和歌山県	23	田中真知	美しいをさがす旅にしよう	生物
	22		著作権者が二次使用の許可を出していないため、掲載なし	
	21	日高敏隆	セミたちと温暖化	自然
	20	茂木健一郎	それでも脳はたくらむ	生活
	19		古文との混合問題	
岡山県	23	長谷川 宏	哲学塾 生活を哲学する	生活
	22	鈴木孝夫	ことばと文化	言語
	21		古文との混合問題	
	20	山鳥 重	「わかる」とはどういうことか	言語
	19		古文との混合問題	
広島県	23	池内 了	パラドックスの悪魔	生活
	22	重松 清	文章の品格	学問
	21	最上一平	広野の馬	生活
	20	佐藤雅彦	毎月新聞	生活
	19	西 研・森下育彦	「考える」ための小論文	言語
山口県	23	阿部芳郎	記載なし	学問
	22	長谷川 權	和の思想	文化
	21	市川宏雄	文化としての都市空間	文化
	20	丸田 健	記載なし	生活
	19	齋藤 潮	名山へのまなざし	生活
鳥取県	23	内田 樹	下流思考 学ばない子どもたち 働かない若者たち	言語
	22	菊池 聡	超常現象をなぜ信じるのか 思い込みを生む「体験」のあやうさ	自然・生物
	21	養老猛司・茂木健一郎	スルメを見てイカがわかるか!	生活
	20	森本哲郎	日本人の感性について	生活
	19	内山 節	里の在処	自然

国語読解テストの出題傾向とその性質

Appendix 都道府県別・年度別の著者、作品名及びそのジャンル（続き）

都道府県	年度	著者	作品名	ジャンル
島根県	23	摺河祐彦	新「やまと撫子」論	文化・生活
	22	齋藤 孝	原稿用紙10枚を書く力	言語
	21	河合雅雄	サル目 ヒト目	生活
	20	笠原良郎	読書すること	言語
	19	鷺田清一	悲鳴をあげる身体	生活
徳島県	23	森本哲郎	日本語 表と裏	言語
	22	内山 節	怯えの時代	自然
	21	竹村公太郎	記載なし	文化
	20	青木 玉	上り坂下り坂	生活
	19	長谷川 權	俳句的生活	言語
香川県	23	黒川雅之	記載なし	文化
	22	溪内 謙	記載なし	生活
	21	山竹伸二	記載なし	生活
	20	栗原 康	記載なし	自然・生物
	19	榎本博明	「本当の自分」のつくり方ー自己物語の心理学	生活
愛媛県	23	鷺田清一	記載なし	言語・生活
	22	脇 明子	記載なし	生活
	21	柳澤嘉一郎	記載なし	生物・生活
	20	青木 保	記載なし	文化
	19	石毛直道	型の美学	文化
高知県	23	金田一春彦	日本語の特質	言語
	22	外山滋比古	ライフワークの思想	言語
	21	平山郁夫	絵と心	生活
	20	内山 節	「里」という思想	自然・生活
	19	佐倉 統・古田ゆかり	おはようからおやすみまでの科学	科学・生活
福岡県	23	森本哲郎	読書の旅	生活
	22	波平恵美子	生きる力をさがす旅	文化
	21	外山滋比古	思考の整理学	生活
	20	好本 恵	話しことばの花束	生活
	19	稲垣佳世子・波多野誼余夫	人はいかに学ぶか	生活
佐賀県	23	森下伸也	逆説思考 自分の「頭」をどう疑うか	科学・生活
	22	外山滋比古	知的創造のヒント	生活
	21	正高信男	ウェブ人間退化論	生活
	20	田中淳夫	森林からのニッポン再生	自然
	19	李 御寧	ジャンケン文明論	言語
長崎県	23	今井むつみ	ことばと思考	言語
	22	内田 樹	街場の教育論	言語
	21	鷺田清一	死なないでいる理由	生活
	20	鯨岡 峻	「育てられる者」から「育てる者」へ	生活
	19	佐倉 統・古田ゆかり	おはようからおやすみまでの科学	科学・生活
大分県	23	福岡伸一	ルリボシカミキリの青	学問
	22	齋藤 孝	違和感のチカラー最初の「あれ？」は案外正しい！	生活
	21	日高敏隆	人里をつくる	自然
	20	池内 了	科学は今どうなっているの？	生活
	19	河合雄雄・石井米雄	日本人とグローバリゼーション	文化

Appendix 都道府県別・年度別の著者、作品名及びそのジャンル（続き）

都道府県	年度	著者	作品名	ジャンル
熊本県	23	福岡伸一	動的平衡	生物
	22	村上慎一	なぜ国語を学ぶのか	生活
	21	高階秀爾	西洋の眼 日本の眼	文化
	20	小原二郎	木の文化をさぐる	自然・生物
	19	青木 保	異文化理解	文化・生活
宮崎県	23	鷺谷いづみ	「生物多様性」入門	自然・生物
	22	河合隼雄	子どもといのち	言語
	21	永井 均	「子ども」のための哲学	生活
	20	外山滋比古	わが子に伝える「絶対語感」による	言語
	19	日高敏隆	春の数えかた	自然
鹿児島県	23	樋口広芳	生命にぎわう青い星	自然・生物
	22	長谷川 權	和の思想	文化
	21	吉田桂二	家づくりの知恵	生活
	20	茂木健一郎	すべては音楽から生まれる	生活
	19	久石 譲	感動をつくれますか？	学問
沖縄県	23	吉本隆明	13歳は二度あるか	生活
	22	大野 晋	日本語の文法を考える	言語
	21	香山リカ	貧乏クジ世代	生活
	20	酒井邦嘉	科学者という仕事	科学
	19	山口仲美	日本語の歴史	言語